

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter (10) 添付ファイル
【投稿】大内秀明 「宇野没後30年 H君への手紙」

H君

早いもので宇野弘蔵没後30年研究集会から、もう1年経ちます。この1年、とくに秋になって、歴史的な事件が続発していますね。

君を研究集会に誘って、直後にメールをもらいました。「私は、自称宇野派だが、実際の宇野派の先生方の難しい話を聴いていると、宇野派を自称する自信がなくなる。それにしても、今時マルクス経済学関係の集まりに、これだけの人が集まるのは、さすが宇野学派とも言えなくもないが、40年前と違って、この議論で若い人が宇野理論になじむかと思うと、とてもそうは思えないのであった。」

君らしい率直な意見で、僕も「やはりそうかな？」と考え込みました。色々反省しなければと思いながら、最近の世界史的イベントをどのように受け止めるか、そんな点から去年の研究集会を振り返ってみたいと思います。君に少しでも自信を取り戻して欲しいからです。

H君

米サブプライムローンに始まる金融破綻は、9月のリーマンブラザーズの破産によって、まさに「暗黒の金融パニック」を経験しました。僕は1932年生まれなので、29年大恐慌を経験していない、「一生に1度」の経験かも知れません。しかし、君にも話したように、株価の暴落を除けば、失業率など29年大恐慌と比べて、パニックはさほどひどくは無い。ドルの暴落も回避されている。19世紀の周期的恐慌と比べても、先進国経済に大恐慌を起こす、あるいは不幸な世界戦争へのバイタリティは無くなったと思います。

先進国は、いずれもポスト工業化を迎えて、経済成長のバイタリティを失ってしまった、慢性的に資金の過剰（過剰貯蓄）を抱え、それが慢性的な投機化のバブル現象となっている。米の過剰消費も投機資金によるもので、サブプライムローンもその一つです。もともと投機のバブルは、弾けるからバブルなので、今度の金融危機も慢性的過剰のバブルが集約され崩壊しただけでしょう。

このように慢性的な投機のバブルに媒介された、過剰貯蓄と過剰消費によるグローバルな先進国経済は、60-70年代と比べ低成長への移行とともに、景気循環のパターンも「衰減」したものにあらざるをえない。山が低ければ谷も浅い。だからまた、低成長のまま景気の拡大期間も延長されるに過ぎない。こんな先進国経済を、「グローバル資本主義」として、新たな資本主義の発展段階とするわけにはいかないと思う。「グローバル資本主義」は、今や悪名高きネオコンの単なるイデオロギー的表現、戦略スローガンに過ぎないのではないか。

H君

金融バブル崩壊の追い風に押されるように、接戦の予想に反し米・大統領選はオバマが圧勝しましたね。オバマ勝利は、80年代からのレーガン、とくにブッシュ父子の共和党政権のイデオログだった保守派のネオコンの完敗に他ならない。旧ソ連の崩壊による米の覇権型一極主義の世界支配のネオコンこそ、市場原理主義を生み、アメリカ・モデルの価値観を押し付け、無謀なイラク戦争を主導し、経済的には金融バブルの拡大をもたらした。そのネオコンの世界戦略が、金融バブルの崩壊とオバマの「Change! Yes, we can.」の訴えと共に、今や完全に破綻したのです。

僕は、「グローバル資本主義」とその新発展段階説は、ネオコンのイデオログに過ぎないと思っています。ポスト冷戦による「一人勝ち」した米の一極支配、超帝国主義論とも言える幻想です。EUなどの地域共同体、冷戦下の「新植民地支配」の破綻と中国など新興国の工業化による勃興、こうしたポスト冷戦による新たな多極化への構造転換を無視した、米主導の冷戦型イデオロギーです。その世界戦略が破綻したのです。今度の金融危機に肩を押された北朝鮮のテロ国家指定解除なども、その一例でしょうね。

また、新興国の工業化も、例えば中国の改革開放など、市場経済を積極的に利用するが、土地や労働力、金融などの商品化には大きな「歯止め」をかけている。それがまた今日、中国の強味にもなっている。単に「市場経済だから資本主義」、計画化なら社会主義と言うのでは、西欧社会主義の位置づけも出来ない。世界資本主義論かも知れませんが、新旧左翼のマルクス・レーニン主義のドグマに過ぎないと思います。ロシア革命とソ連が崩壊した現在、ドグマからの自由な発想が必要だと思うし、その点で宇野3段階論についても点検は必要でしょう。

H君

僕も宇野理論が、ロシア革命とソ連の成立で資本主義の発展段階にピリオドを打ち、それ以降を現状分析とした点は、当然のことながら疑問です。しかし、金融資本を超える新たな資本の蓄積様式は登場していない。20世紀、国家主義が台頭し、東のソ連が「国家社会主義」として発展し、西側も福祉国家など「国家資本主義」として体制の組織化を図った。それがポスト冷戦でソ連が崩壊し、西側先進国は上記のごとくネオコン戦略での統合ができぬまま破綻した。世界史は、ポスト資本主義にむけて、慢性的バブルの転換期を「過程」している。人類の「前史」の長い苦悩でしょうか？

無論、世界史の新たな現実を踏まえ、石炭・鉄鋼など基礎資源型生産財だけでなく、例えば米の自動車産業など、耐久消費財を十分射程に入れた金融資本の蓄積など、段階論の修正・補強は必要です。今日、GMはじめ米ビッグ3の経営破綻による「フォーディズムの落日」を迎え、例のレギュラシオン理論の再検討をも必要としているからです。

しかし、この段階論の修正が、純粋資本主義の否定による、世界資本主義の発展に還元する事にはならないと思う。世界資本主義論は、グローバルに拡大する世界市場に資本主義を解消し、資本主義の法則性を否定して、市場経済の歴史的变化を無原則に追い求めつ

つ、世界革命の妄想を残すのみで、結果的には資本主義を永遠化することになるだけでしょう。

H君

没後30年研究集会に出席し、その後の関連論文も読んで、純粋資本主義の抽象を否定する考え方が、余りに多いのに驚きます。世界資本主義論への回帰現象でしょうか？世界資本主義 VS 純粋資本主義の論争は、岩田・鈴木原理論の登場もあり、すでに宇野ゼミの内部でも、散々議論されました。論点も、多少の違いがあっても、ほぼ同じ議論の蒸し返しに過ぎないと思います。しかし、純粋資本主義を否定すれば、それは3段階論の否定であり、宇野理論の死亡宣告でしょう。告別式に君を誘った積りはありませんよ。

『資本論』での純粋資本主義の抽象ですが、単なるイデオロギー的仮説に過ぎなかった唯物史観から、マルクスが「学説史的検討」(とくに『剰余価値学説史』)に基づき、理論的に脱却した結果でした。無論、マルクスも人間だから、脱却しようとして不十分な面が残る。『資本論』が未完だったので、なおさら残滓が多かった点はある。しかし、『資本論』の対象と法則が、純粋資本主義のそれだったことは、いまさら確認の必要は無いでしょう。問題は、抽象の方法です。単なる歴史の発展の「模写」でなく、抽象の方法の模写です。この方法の模写は、ご存知の通り19世紀中葉のイギリス資本主義の発展が純粋化の傾向を持っていた、その歴史的傾向の模写とされています。

ところが、マルクスは純粋化がどこまでも拡大するとしていたが、宇野さんは「純粋化が逆転する」、この逆転を根拠に方法模写論を主張した。しかし、これでは純粋化を否定しながら、純粋化を主張する自家撞着に陥り、純粋資本主義の抽象は誤りだ、との批判です。こうした批判は、30年以上も前、宇野さんの生前にも故佐藤金三郎氏などからの批判があり、論争されていたので、その蒸し返しです。

この論争の事情については、桜井毅『経済学を歩く』¹、1「純粋資本主義のアポリア」を是非参考にして下さい。講演なので読みやすいし、僕は全面的に賛成です¹。「逆転」は、段階論との関係で、資本主義の歴史が金融資本の発展に逆転した点からみると、原理論は純粋資本主義の歴史的・現実的抽象なのだ。桜井氏の言うとおり、宇野さんの説明に不十分な点があったように思うし、論争や批判の相手があつての宇野さん論文は、とくに含蓄が深く、難解で誤解を生みやすいのです。逆転論は、段階論と原理論の関連で意味があるだけだと思います。

純粋資本主義の抽象にとって大事な点ですが、桜井氏がとくに強調しているのは、経済学説の理論史との関連です。方法の模写ですから、資本主義の発生・発展に対応して、認識の方法とともに、学説も批判的に継承され発展してきた。17世紀までの下向法 = 帰納法、18 - 9世紀古典派経済学の上向法 = 演繹法を踏まえ、マルクスは単なる上向法では

¹ 拙稿「『資本論』と純粋資本主義」1967年10月(経済学論集33巻3号)。世界資本主義論に対する批判として書かれたものである。

なく、『資本論』ではヘーゲル弁証法により、自律的運動法則として、純粹資本主義の抽象に成功した。

僕は、ヘーゲル哲学をあまり勉強していないけれども、彼の古典経済学批判と言い、弁証法の自律的法則のロジックと言い、やはり19世紀20年代からのイギリス中心の周期的恐慌を含む景気循環の歴史的現実があったからではないか。だから、純粹資本主義の抽象は、周期的恐慌の必然性＝恐慌論の解明です。イデオロギー的仮説に過ぎない唯物史観では、「恐慌＝革命テーゼ」の崩壊論にはなっても、周期的恐慌の解明にはならない。マルクスも、宇野さんも、唯物史観とそのドグマに還元されていた『経済学批判体系』とプランを捨て、『資本論』の純粹資本主義の恐慌の必然性解明に取り組んだのです。

実際、マルクスに即して宇野さんは、『経済学批判体系』プランの放棄を確認しています²。しかし、生前は原理論の整序に全力を尽くされ、方法の模写のための経済学説の理論史による検証まで十分手が廻らなりました。それを十分に自覚されていて、宇野ゼミのわれわれ学生の研究テーマとされたのです。僕は、価値論を分担し『価値論の形成』を書き³、桜井氏は転形論争を踏まえた『生産価格の理論』を書いた⁴。一種の「研究的分業」ですね。その後、僕は宇野さんとの約束もあり、先年『恐慌論の形成』(05年)を出版した。ただ、僕の怠慢のため、生前に間に合わなかった点、申し訳なく思っている。

H君

僕は純粹資本主義の抽象は、資本主義の純化傾向とか、その逆転とかでなく、周期的恐慌による資本主義の「自律性」に基づくと考えています。純粹資本主義の宇野「原論」は、宇野『恐慌論』として完成された。マルクスも1857年恐慌まで抱いていた唯物史観の恐慌＝革命テーゼを捨て、プランを変更して、周期的恐慌の拡大を踏まえ、『資本論』の純粹資本主義の法則性の解明を行った。キーポイントは、資本の蓄積過程を踏まえて、競争による『資本の絶対的過剰生産』の解明に成功した点でしょう。そこには1870年代の限界革命の影響でしょうか、限界原理による追加投資の資本蓄積が説かれています。

実際、『資本論』の「近代社会の経済的運動法則」は、周期的恐慌を含んだ「絶えざる不均衡の均衡法則」、「無政府的法則性」です。いわゆる近経の「一般均衡論」とは、恐慌論があるか、無いか、で大違いですが、市場の均衡論としては同じですね。だから循環的法則になるし、自働崩壊論ではないのです。そこからまた、人間の主体的実践の意味も提起できる。

H君

純粹資本主義の抽象による宇野『恐慌論』は、言うまでもなく労働力商品化を基本矛盾に展開されます。土地の商品化と表裏になって、市場経済の社会的再生産の全面支配となり、経済原則と共に社会的均衡を実現する。しかし、労働力商品の特殊性から、周期的恐

² 宇野弘蔵「『経済学の方法』について」(宇野『著作集』第3巻所収)。

³ 『価値論の形成』1964年東京大学出版会。

⁴ 『生産価格の理論』1968年東京大学出版会。

慌を不可避とする。「絶えざる不均衡の均衡法則」の ” 格差社会 ” です。労働力商品としてアトム化され、家族や地域の意味は失われる。土地の商品化の点では、市場経済による土地自然の環境破壊に繋がる。このような基本矛盾を抱え込んだ資本主義社会が、変革の対象です。変革の主体は、労働力商品の担い手であり、働き生活する人間です。

僕は、純粋資本主義の抽象によってのみ、社会変革の「対象と主体」が明確にできる。段階論、現状分析は、その「対象と主体」の歴史的变化、具体的あり方を解明する。それに反して、純粋資本主義を否定した唯物史観や世界資本主義論では、プロレタリア独裁や植民地解放の名の下に、周辺革命論など権力奪取による上からの国家社会主義の運動の失敗を重ねてきた。旧ソ連の崩壊も、その例に漏れないマルクス・レーニン主義のイデオロギーによるものだと思います。

宇野『恐慌論』は、純粋資本主義の抽象により、そうしたイデオロギーから自由だった筈です。そして、あれほど厳しくスターリン論文を批判していた宇野さんが、旧ソ連を擁護し続け、ロシア革命をもって資本主義の段階的發展にピリオドを打ったのか？僕には理解できませんが、やはり戦前・戦後、ソ連崩壊まで支配した日本の伝統的左翼イデオロギーに捕われていたのでしょうか？

H君

最近僕は、価値論、恐慌論に続けて、『資本論と社会主義』について、マルクスの晩年の検証しようと思っています。君もご承知の通り、手始めにマルクスとの接点として、W・モリスについて研究しているのも、そのためです⁵。どうか、これからも宜しくお付き合い下さい。

⁵ W. Morris, E. B. Bax "Socialism, its Growth and Outcome" 1893.